

帰してはいけない小児外来患者

崎山 弘, 本田雅敬 編

吉田兼好の「命長ければ恥多し」の言葉どおり、小児科医は誰しも臨床経験が長いほど臨床現場で「痛い」思いをした経験を持つ。私自身もプロとして恥ずかしいことではあるが、救急外来など同僚・先輩医師からの支援がなく、臨床検査も十分にできない状況にあり、しかも深夜で自分の体調が必ずしも万全ではない中で短い時間内に決断を下さなくてはならないときに、「痛い」思い、すなわち診断ミスをしたことがあった。かつての大学や病院の医局などの深い人間関係が結べた職場では、上司や同僚から心筋炎、イレウス、気道異物、白血病などの初期診療時の臨床上の注意点やこつを日々耳学問として聞く機会があり、それが救急外来などの臨床現場で大いに役立ったと感謝している。質の高い医療情報を獲得する手段が今よりも少なかった昔は、そのようにして貴重な臨床上の知恵が次世代に伝授されていたのだと思う。

今回、崎山弘先生と本田雅敬先生が編集された『帰してはいけない小児外来患者』を拝読した。本書では、見逃してはならない小児の重症疾患の実例が多岐にわたり丁寧に解説されている。初期診断時に重症疾患をどうして正しく診断できなかったか、そして、どのようなちょっとした契機により重症疾患の診断に気付かされたかが手に取るようにわかる。読んでいる途中で、昔のように自分が医局のこたつで上司や同僚から臨床上の貴重な知恵や注意点を伝授されている気がしてきた。

日本小児科学会は「小児科専門医は子どもの総合医である」と宣言した。そして、小児科専門医としての到達目標を掲げ、最近数年間は主として若手小児科医

を対象とした小児科専門医取得のためのインテンシブコースを毎年開催している。本書を拝読して、本書のような切り口で初期診断時に見逃される小児の重症疾患について教育する方法も有効ではないかと深く感じ入った。

本書には、東京都立小児総合医療センターの職員が経験された貴重な実例の数々が示されており、まさに同センターの総力を挙げての壮大な仕事である。さらに、編集と執筆とを兼ねた崎山弘先生は同センターの前身ともいえる都立府中病院小児科にかつて勤務され、退職後も開業の傍ら同小児科で当直と夜間の救急外来を定期的に担当され、長い期間地域医療に絶大な貢献を果たしてこられた。同病院小児科では本書に記載されているような、すぐには診断できなかった重症疾患の症例検討会が、横路征太郎部長の下で施設外の関連する小児科医と一緒に定期的に開催されていた。おそらく本書の企画には、このときの症例検討会の精神が深く反映されていると私は勝手に推測している。

本書は日常の小児医療に従事する者にとって、臨床上の頂門の一針ともいえるべき貴重な示唆を与えてくれる。臨床現場で小児医療に携わる者にとって本書は極めて有益であり、一人でも多くの関係者が手にとって愛読されることを祈る。

国立成育医療研究センター理事長 五十嵐隆

A5・頁224 2015年4月

定価：本体3,600円＋税

ISBN978-4-260-02138-8 医学書院